

第2セッション

「放送公開講座の課題とその分析」

第2分科会「放送公開講座の活性化をめざして」

○司会（石田幸平・放送教育開発センター教授）

時間が過ぎておりますので、早速、第2セッション第2分科会を開催させていただきます。

第2セッション第2分科会では「放送公開講座の活性化をめざして」というテーマで、「受講生サービスと受講生拡大の観点から」に関する研究ともう一つ「大学授業への活用の観点から」という二つのテーマで報告していただくわけですが、今回は、従来の研究についての反省と新しい提案をしていただくところに力点が置かれておりますので、本年度の研究成果については、ごく簡単に説明していただくということで入っていく予定であります。

なお、コメンテーターとしまして、放送教育開発センター助教授廣瀬洋子先生、放送教育開発センター前教授であられた郡山女子大学家政学部教授若松茂先生、放送局を代表しまして、名古屋テレビ放送報道局社会情報部長清水俊郎さんに、右側に、きょう発表していただく先生方がいらしていらっしゃいます。今一々ご紹介しないで、その都度ご紹介したいと思っております。

時間が限られておりますので、本日は、今後の研究はどうあるべきかというところで、大いにフロアからもご意見をちょうだいして、そして、従来の研究面で悪かったところ、停滞している部分を克服して、新しい研究を目指していきたいと思っておりますので、何分よろしくお願いいたします。

それでは、最初に、北海道大学医学部教授阿部和厚先生から、「受講生サービスと受講生拡大について」発表していただきたいと思っております。よろしくお願いします。

○北海道大学（阿部和厚 医学部教授）

北海道大学放送講座はことしで10周年ということで、これまでを踏まえ、今後の発展に向けてワーキンググループをつくりまして、「テーマの開発」ということで、テーマの公募と10周年記念シンポジウムを行いました。それから、受講生に対するアンケートを見直しました。

[スライド]

このテーマの「受講生サービスと受講生拡大について」から入りますと、これは新潟大学と北海道大学で3年間共同研究をしてまいりました。ここで非常に意義のあったことは、いわゆる地方大学同士が太いパイプラインでつながったということだと思います。それから、その成果として双方向のはがきが出てきました。

この双方向のはがきの意味は、放送は一方方向性で、それを補うためにスクーリングというものが出てきます。スクーリングも、どちらかといいますと、講義の形の一方方向性の傾向が強いわけです。これはまた工夫する必要があると思います。それをさらに補うものとして、講師に対して受講生から、はがきで問い合わせをする。そして、講師はそれに答えるという

形の双方向コミュニケーションを持つために、はがきというものを工夫したわけです。

[スライド]

3年間やってまいりましたけれども、このはがきの成果は、平成4年度につきまして見ますと、ラジオ、テレビとも250通ばかり来ております。これは250回の質疑応答があったということで、大変な成果と言えるかと思うわけです。

ところが問題なことがあります。これは主任講師に非常に負担になることです。

[スライド]

主任講師に負担。放送講座自体が、それを担当することは大学機能の中で一つの負担になるわけです。主任講師に限って申しまして、これの企画から終了までは2年間かかります。特に最後の1年間のところは、テキスト13人分をきちっとまとめていく作業、番組をまとめていく作業、そしてスクーリング。それに加えて、恐らくこれから300通ぐらいになるかもしれないはがきに答えていくという、双方向のはがきの作業ということで、かなりの負担になります。

[スライド]

大学教官という肩書がつきますと、教育研究、管理運営、そして加えて、放送講座という仕事がかかる。この丸印は実際、義務的にどうしても時間がとられることになります。

そうしますと、この最後の1年は、本来、評価がきちっとされている形の研究ができなくなることをぼやかれる。頼む立場としては非常につらい立場にあるわけです。

[スライド]

そこで、放送講座の意義を説くわけですが、社会に大学を知ってもらうことによって大学を支援してもらう。それによって大学の発展があるんだというにしきの旗を振っているわけですが、このスライドのように、これがなかなかわかりにくいということがあります。

[スライド]

それで、テーマの公募を行いました。この目的は幾つかありますけれども、一つは、みずからやる気のある、モチベーションを持った主任講師を開発することによって、よい番組をつくること。それからもう一つは、実際のテーマが最後に終了するまで2年間かかります。そのためには、自前に幾つかのテーマを用意しておく必要があります。少なくとも2年は決めておく必要があります。それによって、またきちっと仕事ができることになります。そういう目的でテーマを公募いたしました。

[スライド]

実際に集まるかどうか心配したんですけれども、テーマ公募はこういう形で行いました。学内でパンフレットやビラを、教官、教授、助教授、講師すべてに配りまして、テーマを5月に公募して6月に締め切るという形で1カ月行いました。

[スライド]

実際に集まるかどうか心配したところ、15の応募がありました。この応募されたものにつきまして、テレビがいいか、ラジオがいいか。それから、映像になりやすいか、図として示しやすいか。音で表現しやすいか、あるいは言葉で表現しやすいか。内容、そのほかを検討して、ラジオ、テレビ、それぞれ二つずつ決定いたしました。

決定の作業は、ワーキンググループと委員会との間でやりとりがあり、そして委員会から、主任となるはずの講師の先生に接触なり、中身をさらに詰めていただき、13回を考えていただく。そして、それぞれ2年分を決定することにしました。平成5年度と平成6年度分が決定したわけです。

[スライド]

こういう決定の作業は、今まで北海道ではテーマ中心で行って来ました。ですから、この応募のテーマ中心という方向で行われております。このテーマ中心ということは、学部持ち回りではありません。テーマに応じて道内全体から、北大も含めて大学、適当な講師を見つける方法で構成しております。

そうしますと、今後、複数の大学で連携するという方向が見えてきますと、このテーマの公募をほかの大学へまた出していくことができます。これによって複数の大学で、テーマ中心に行っていく方向性が出てくるわけです。

[スライド]

そういう将来の方向を見まして、ことしはシンポジウムを行ったわけです。この目的はまず、これまでを踏まえ、今後の展望を見る。もう一つは知ってもらう、広報活動で宣伝の目的です。

[スライド]

そのポスター、ビラの要約ですけれども、「あなたにとって、大学放送講座とは何ですか」。この「あなた」というのは地域住民すべてです。大学の先生も生徒もいる。それから、それをサポートする側もすべての人々にとって、「大学放送講座とは何ですか」という呼びかけです。そして、「地域に開かれた大学は いまー放送の電波にのせて」という題で、地域シンポジウムを行いました。

[スライド]

170人ほど集まりました。中身ですけれども、最初、まず大学側、放送局、そして協力組織の教育委員会から5分ずつ話をいただき、それから、大学を電波に乗せてということで、大学でどういうふうに取り組んでいるかということ話し、大学を放送局へということで放送局でまとめてもらいました。放送局の方では、いかに講座をつくるか。今までの流れはどうだったかという紹介の20分ビデオを見せながら説明がなされました。

[スライド]

それから、受講生の代表にも話していただきました。大学を家庭でということで、自宅という格好で受講生の代表にも話してもらいました、そして、この年度の案内ということでシンポジウムを構成しました。これは10月に行いましたけれども、その次の週から、その年度の放送が始まるときに行ったものです。それから、出席者にはアンケート調査を行いました。

[スライド]

こういったものは今後を見据えてのことですけれども、例えば今後、こういう方向だろうというわけです。通信衛星が上がって、中央からの電波で、全国でこの放送講座が見られることになるわけです。そうしますと、これは中央化、全国平均化の方向ということで

す。

ところが私たちは、地上波で広い北海道全体をカバーしております。これは、地域特性、地域の文化そのものを取り上げている。その文化になっているということもまた重要ということになります。

[スライド]

その方向、この放送講座は10年間やってまいりましたけれども、ここで重要なのは、函館、札幌、留萌、旭川、北見、帯広の教育委員会の協力組織は既に、これを自分たちのものとして取り入れてやっております。ですから、これを実施組織の中に入って実際にはやっているわけです。そして、これは受講生だけでなく、多くの視聴者、それから聴取者がおります。

そうしますと、今までの10年は、実際にはセンターでやっておりますも、地域では、この地域で行われて見るという形で取り入れられているわけです。ですから、今後を見ますと、これをちゃんと一貫性を持って継続していく責任が出てきます。

[スライド]

これは、ことしの放送講座のまとめのところで出てきた言葉を絵にしたものです。ことしは、「北海道の住まい」を取り上げました。北海道は、寒さ、雪というハンディに対応して北海道の住まいができる。そういった住まいが北海道特有の文化をつくり上げる。その文化を共有していき、そしてそれを永続させていく。これが北海道の豊かさにつながるという話をしました。

ですから、こういったものは新しい視点であり、こういう視点をつくることがまた放送講座の役割、放送講座が地域の文化の一翼を担っている形になります。

[スライド]

地域に根差した放送講座は、教育、研究、生涯学習の大学3本柱のうち、生涯学習への対応を担っていることになるわけですが、この研究というものはきちっと評価される形が一応あります。ところが、ほとんど研究できないというような、実際に時間がとられる生涯学習もまた、研究と同じように評価する形が大事なんだというだけじゃなくて、その形がきちっと確立する必要があると思います。やる気のある人だけを集めてもだめだ。この形をきちっと確立する、評価の形を確立する必要があると思います。

[スライド]

これは最後のスライドですけれども、ことしの放送講座「北海道の住まい」の一番最初のところを絵にしたものです。北海道の冬のダイヤモンドダストがバックにきらきらと踊っています。そこに「北海道大学放送講座」としてタイトルが出てきます。

これは10年間やってきた形で、これをさらに継続していく必要がある。この継続のためには、これから行う複数の大学が連携しながら、先ほどと同じこの講座を共有しながら、そして永続性を持たせながら、地域の豊かさに結びつける。そうしますと、とにかく連携をどうやってやるか。恐らく北海道全体で一本化してやる必要があると思います。それによって一貫性が出てくると思います。そういった方向で今後、さらに10年を見て進めなければならないと思っております。

以上です。

○司会（石川）

どうもありがとうございました。

それでは続きまして、高岡短期大学短期大学開放センター教授坂川幸雄先生に、「受講料と受講生のニーズ」についてお願いいたします。

○高岡短期大学（坂川幸雄 短期大学開放センター教授）

それでは、「受講料と受講生のニーズについて」ということで、ことしは2年目の報告になっております。昨年度初めて、有料のテレビ講座ということで始めまして、ことしは2回目の受講料を取る講座でございます。

[OHP]

ここにお見せしましたのは、過去5年間の経費負担の経緯でございます。平成5年度もそうですが、受講生にアンケートを求めましてやる講座で、平成4年度「デザインの時代」というのは164名の受講者がございまして、これは例年とほぼ同じぐらいの数でございます。ことしは、ちょっと様子が変わったせいでしょうか。1年ごとにジャンルが変わっております。つまり、私どもの方は工芸学科と情報学科の2学科制ですから、学科を交代でやっているわけです。工芸の方から始めまして、工芸、情報、工芸、情報というふうに科目を持ってきたおるわけです。

ことしの調査はこのほかに、一般講座を大体10講座ないし11講座ぐらい毎年やっております。これは対面式の講座でございますが、それとの比較についても後ほど触れたいと思います。

[OHP]

学習活動の形といいますと、ご承知のように放送メディアはリアルタイムでありまして、片方向の特性を持っておる。双方向と言えるのは、テキストのおしまいにくっつけてありますはがきを利用した質問はがきによる質問と、スクーリングにおける質問があります。スクーリングは片方向性の部分もありますし、双方向性の部分もある。ことしは特に、スクーリングについても若干工夫をしてみました。

[OHP]

放送講座で、今後どういうところに力点を置いたらいいかということを考えてみたわけがあります。片方向という性格から考えますと、番組の充実あるいは録画、テープの貸し出し。現在は来て見てもらっているわけですが、それを貸し出しする方向も考えられるんじゃないか。テキストは受講料の対価として、受講生は大変重きを置いて見ているわけです。その充実ということは当然のことだと思います。

さらに、ことしやってみてわかったことですが、スクーリングというものは、大いに工夫した方がいいんじゃないかということでもあります。双方向につきましても、はがきだけでなく、電話もありますし、ファックスもありますので、いろんな方法のメディアを使いやすい形に持っていけないだろうかということでもあります。

それから、スクーリングのときにも、学習の効果ということを考えますと、質疑応答を活発にした方がいいんですが、活発にすることをただ待って望んでおるだけでは、どうもぐあいが悪いので、そういふうに何かと誘導することを考える必要があるんじゃないか。それか

ら、学習の評価ということになろうかと思います。

[OHP]

ことしの調査項目ですが、こういうところの4項目を挙げてみました。こういうことを観点としてやってみたわけであります。

ことしは2年目ですが、受講料に対する評価。受講料が高いか、安い。あるいは受講料というものを何に対する対価と見ておるんだらうかといったことを見たい。それから、スクーリングに対してはどう思っているんだらうか。これと受講料との関係はどうなっているんだといったこと。あるいは今後の放送講座に対しての希望はどうなっているか。

つけ足しですが、一般公開講座は、テレビ講座の受講生とほぼ同じぐらいの受講生がごさいます。11講座全部合わせまして、延べ180名ぐらいの受講生がごさいます。したがって、大ざっぱに言いますと、テレビ講座と一般講座の受講生はほぼ同数と見てよろしい。

両方とも顔を出している人は何人ぐらいだろうかと、これが余り重複し過ぎておりますと、両方の部分の調査をする意味が余りないのじゃないのかということも考えて調べてみましたら、10名しかいなかった。結局、テレビ講座も一般講座も受けている人は10名ですから、いろいろ統計をとる上で、さほど支障にならないんじゃないかと考えております。

[OHP]

これは、今年度の受講料そのものが適当なのか、高いのか、安いのかということをや円グラフにしたわけでありますが、適切であると答えた人が70%ちょっと超えております。昨年度は63.6%でございました。したがって、ことしは、適切であると答えた人が6.7%ふえております。それと、比較して高いと考えている人は13.2%になるかと思ひます。その13.2%の人ですが、昨年は24.6%ありましたので、意外と受講料って高いなと思ひている人のパーセントは11.4%減りました。

ですから、傾向としては、受講料に対する抵抗が昨年よりは和らいだといひましようか。そして、7割の方が適切であると考へ、さらにまた、11%の人が安いと思ひているわけですから、8割以上の方が、適切ないしは安いと考へていると見ていいんじゃないかと思ひます。

[OHP]

ここで一体、高い、安いというのは、どういう点でそう思つたのかという棒グラフでございすが、大ざっぱに8割の人が適切ないしは安いとして考へている中身としては、昨年もこういう傾向でしたが、テキストに対する対価として受講料を考へている人が最も多いんですけれども、これは、過去の経緯があろうかと思ひます。

過去5年間のうちの最初の3年間は、受講料ではなくて、テキスト代の実費としていただいておつたものですから、結局、受講者は常連化してありまして、どうしても以前に持つておつた感覚がまだぬぐい切れない部分があるんじゃないか。したがって、ずっとテキストに対してお金を払っているんだという、一つの考へ方の慣性があるんじゃないかと勘ぐられるわけでありすが。これは今後また、詳しく調べてみないとわからないと思ひます。

ただ、スクーリングのことについて特異的なものは、スクーリングについて、31.9%の人が受講料の対価として認めておるということは、昨年は9.1%であつたのが、どうして22%以上にふえたのかということですが、これは、今までにないスクーリングの形を工夫して

たわけであります。それは、スクーリングのある1回に実技を取り入れて、実際に受講生が頭を働かせ、手足を動かして、学生が演習、実習をよくやる場面をスクーリングで設けたわけであります。そのことがおそらく、スクーリングに対しての受講料であるという意識が、ことしは特徴的に出てきたんではないかと考えます。

新しい知識の獲得はひどかったです。これは、番組内容の補完というスクーリングの役割も考慮しないといけなかったのかという反省が、ここから一つ出てくるんじゃないかと思います。

[OHP]

これは、受講料が高い、安いと考えた人たちのそれぞれの視点といひましようか、そのクロスデータであります。適切であって、テキストの内容に対してというのが最も多い。ごらんのとおりでありまして、高い、やや高いというのは、一番多いのは放送時間の回数であります。これは最初、私どもがテレビ講座の受講料をどういうふうに考えたかということですが、結局、テレビ講座は、放送時間と一般公開講座の時間数と同じようなウエートで見るとしますと、一般公開講座に比べますと時間数が少ないものですから、割安になるはずですが、しかしながら、テキストが入り、スクーリングが入るといったことになると、これが逆転するわけであります。

ですから、受講料を考える場合に包括的に考えますと、一般公開講座よりも高くなって当然であると私どもは考えたわけでありましたが、ただ、受講生の方は、単純に時間数の比較をするものですから、一般公開講座の時間数に対して、ちょっと少ないのという感覚をお持ちじゃないかと考えます。しかし、結果的には、この受講料金の額に対しては肯定的な結果が出ておりました。テレビ講座の受講料というのは、一般講座に対する文部省の示す基準とは異なるのであるということがご理解いただいております。

[OHP]

今後、スクーリングに対してどんな希望を持っているかということ、過去3カ年分とりました。大体似通った結果になっております。スクーリングは、講師と直接対面できるメリットがあること。質疑応答によって、テキストあるいは視聴を通じて生じた疑問を解決できる。つまり、新しい知識を獲得することができる面。あるいは学習意欲が向上した。いろいろのメリットがあって、出席の必要性を強く感じているのは、過去3年ともそうでありました。

[OHP]

放送公開講座への要望ではありますが、テキストの充実が最も高い。それから、在宅学習の支援が余りニーズとしては出てこなかったんですが、これははがきによる質問が少ないことでも、およそ傾向としては予測できたことであります。

[OHP]

これはテレビ講座以外の、大学へ来てもらって受ける一般公開講座の感想であります。これは昨年のテレビの受講料の結果と非常によく似ております。全体として適切で安いというのが圧倒的に多い。テレビも、結果としてはよく似たようなものになっております。

[OHP]

これも一般公開講座と同じ設問をしておるものですから、今度は教材そのものよりも、むしろ受講料は、講座の内容あるいは時間数について受講料を払っているんだという一般公開講座の結論が出ております。

一般公開講座とテレビ講座受講生の両方に、同じ項目で質問した結果の折れ線グラフですが、破線が一般講座、実線が放送講座です。非常によく似通った、共通した傾向が認められます。私どもは、一般公開講座のニーズと放送公開講座のニーズが違うんじゃないかという予想を持っておったわけです。しかし、ほとんどそういう予想が外れまして、今後はできれば、なぜ共通したか。あるいはどこかにまだ違いがあるのかということについては、今後の調査にまかたいと思っております。

どうもありがとうございました。

○司会（石田）

「受講生サービスと受講生拡大の観点から」に関するテーマの発表はこれで終わりですので、ここです、長い間このテーマに関する調査研究に携わってこられた若松先生から、コメントをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○郡山女子大学（若松茂 家政学部教授）

ただいま北海道大学阿部先生からは、テーマの公募の問題を中心に新しいご提案がありました。それから、高岡短期大学坂川先生からは、有料のテレビ教育講座の特に受講料の問題、双方向の学習の指導という問題について、ご研究の結果をご発表になりました。

最初の北海道大学の内容につきましては、きょう、大変感銘を受けた次第であります。と申しますのは、北海道大学は、地域の教育委員会との密接な連携のもとに、長年大学講座をやってきておられまして、特に各地の地方自治体が、まさに大学を自分たちのもの、自分たちの授業であるという考え方が北海道に大変浸透しておりまして、非常に末端の隅々まで協力が得られている状況の中で、そういう実績を踏まえて、さらに大学放送講座を発展させるために、今度はテーマ自体の問題を取り上げられた。

テーマのことににつきましては、別の調査によりますと、公開放送講座で受講する動機は、放送講座の場合、第1にテーマが関心があったというのが挙げられるわけです。その次が、教養を高めるという答えです。さらに、放送大学の場合の受講の動機はまず教養を高める。それから次は、学位、学士号を取得するのが続いておりますけれども、放送講座の場合に、放送大学と違いますのは、まず第1に挙がってくる動機が、テーマに関心があるということです。

そういうことを考えますと、テーマを一般に公募して、あるいは地域社会での一番ニーズの高い問題を取り上げるのはまさに正論ということで、これをどうしてももう少し早くやらなかったのかというのを、ここで私自身も改めて思うわけであります。

それから、大学のあり方として、教育、研究、生涯学習の対応という3本柱を挙げられて、全国的のものと地域レベルのものと二つ共存すると言われた。全国的なものは、例えば、放送大学のようなものとか、放送衛星によって教養学部科目を放送することが計画に上がっておりますけれども、それと大学放送講座が両立していかれるということを指摘しておられる。地域特性を生かしたテーマを選ぶことによって、全国レベルの教養の科目とは、両立し

ていかれることをお示しになって提案をしていると受けとめております。

いずれにしても、大変感銘を受けた次第であります。その方向でまさに放送公開講座の方も、今後進むべきであろうかと感じさせられます。

次に、高岡短期大学の坂川先生からのご発表は、工芸学科、情報学科という非常にユニークな学科をお持ちの大学でありまして、したがって、地域社会で実技を中心とした学習意欲が非常に盛んであるという背景を踏まえて、そのニーズにこたえるような学習指導を多角的に進めておられるわけです。特に先生は、メディアを利用して学習の指導を、県内の大学までにやってこれられない人たちに対しても、メディアで届けるということについても研究を進めておられるわけであります。

それから、受講料につきまして、いろいろな角度からご検討になっておられます。この受講料は、実は大学がことしをピークとしまして、来年度から18歳の入学適齢者人口が減っていくということで、大学にとっては、内山先生がしばしばおっしゃっているように大学淘汰の時代。大学生生き残りを模索する状況になってまいりますと当然、アメリカ等の例を見ましても、かなりのウエートで成人学生を受け入れなければならない時代になる。そうしますと、大学が成り立っていくためには、成人学生の授業料の問題。無料では大学が生き延びることができませんので、これは適切な対価をいただいて、生涯学習への対応ということになるんではなかろうかと思えます。

そういう意味では、大変な貴重な研究課題に取り組んでおられるわけでございまして、ご発表によりますと、かなり明るい希望が持たれる。引き続いてこの問題は、どの程度の授業料まで学生が耐えられるかということについて検討していかなければならないと考えております。

どうもありがとうございました。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

続きまして放送局の立場から、報告についてコメントをいただきたいと思います。清水社会情報部長、お願いいたします。

○名古屋テレビ放送（清水俊郎 報道局社会情報部長）

ただいま、阿部先生の三つのご提案はいただけるなと思って拝聴しておりました。それから、坂川先生の料金に対することは、私もよくわかりませんが、ちなみに名古屋市生涯教育センターの場合には、17回のスクーリングをやりまして、テキスト代を別にして4,800円と聞いております。いずれにしても、将来の発展のためには必要なことであると思っております。

私は、経験が非常に浅いんですが、番組の成長過程と地域の受講生サービスの関係はどうかというのをご報告させていただきます。

私の方は、公開講座が始まりまして8年になりますが、実際に生涯教育センターでスクーリングを始めたのは3年前からです。それまでの番組づくりはどうであったかといいますと、大学の講義を忠実にテレビ化する。つまり、ほとんどノー編集です。言ってみれば、直訳の時代であったと言えます。それから、少しテレビ的な構成を意識いたしまして、わ

かりやすいということですが、このころから、アバンタイトルをつけたり、映像資料を対応したり、図表類の工夫をしています。言ってみれば、意識の時代に入ったわけです。

直訳の時代の視聴者からの反応はどうかといいますと、主題の提示をしてほしいとか、まとめのコーナーをつくってほしいとか、割と漠然とした反応しか返ってきませんでした。それで、今年度の「環境を考える」は18回のアンケートをやったんですが、最終的に受講者の方々と面談をいたしまして、そこで具体的なご意見を伺いました。

そうしますと、個々のシーンについて、あそこは五感に訴えるものがあったよ。臨場感があったよ。感動があったという意見もありました。これは多分、疑問が氷解した感動だろうと思うんですが、そういうご意見をいただいております。それから、積極的な意見としては、参考文献をぜひ挙げてほしい。データの表示時間が短いではないかというように非常に具体的にになってまいりました。これは、私たちの番組が最初に比べまして、多少は進歩しております。それとともに、視聴者からの反応が大変具体的になってくるということは、それをフィードバックさせて、翌年度の番組に中に生かすことができる。つまり、この繰り返し番組にとっても大切であるし、それから、これが受講生サービス、受講生拡大につながるんじゃないかということを感じ始めているわけです。

それで意識をしたわけですが、これからは名訳ができないものか。これはかなり時間がかかるし、いつになるかわかりません。ただ、私たちは、翻訳をするだけではなくて、番組制作者としても新しい発見をしなくてはいけない立場であると思います。

昨日からの討論を反省しながら考えているんですが、大学と視聴者の間の仲立ちではあるけれども、単なる仲立ちではいけない。つまり、今度は私たちは、今まで先生方に、なるべく番組に近づいてくださいというお願いをしてきましたけれども、そうではなく、学術研究の場合にも、私たちは、積極的に接近すべきではないかということを感じております。

先ほど、教育と研究と生涯学習への対応の3本柱の話がありましたけれども、これは言いかえてみますと、大学と放送局と視聴者との関係です。言ってみれば、活字と映像と音声の融合による新たな創作活動ではないかということが言えるかと思います。

それから、テーマとの関係ですが、実は3年前に生涯教育センターでスクーリングが始まった動機は、その年のテーマは「食」です。人間生活のかかわりで、非常に生活に密着したテーマであったせいもあると思いますが、この年は、主婦の方が非常に多かったということです。それから、翌年の「情報と人間」は会社員の方が多かった。今年度の「環境を考える」は、会社員、公務員。特に男性の会社員、公務員の方は、ご自分の仕事との関連で大分強くとらえていらっしゃる。半ば実用という面もあると思うんですが、テーマによって受講層も受講する動機も変わってくる。男性のサラリーマン、公務員の場合には、むしろ仕事としてとらえていらっしゃる。それから、ご年配の方あるいは主婦の方は、教養あるいは趣味としてとらえていらっしゃる。ですから、テーマ選定をどうするのかというのは大変難しいと思いますが、いずれにしても、大学、放送局、視聴者、地域の方々の三者の中で、何らか形で決定されるべきではないかという印象を持ちます。

以上でございます。

○司会（石田）

どうもありがとうございます。

ただいまのところ、フロアの方からご意見などがありましたら、お伺いしたいと思います。どなたかいらっしゃいませんかでしょうか。

○新潟大学（廣田秀憲 農学部教授）

阿部先生のお話で、双方向の話が出まして、はがきによるやりとりの話がありました。私もやっているんですが、どうしても受講生全体の中で、返事のパーセンテージがどんどん下がっていきます。私どものところも、今年度は非常によく、初め30%ぐらいからだんだん落ちていって20%でとまりましたんですけども、どうするかというのは、数をふやすことも大事ですけども、実際についてきてくれる人たちをどうやってふやしていくかということが非常に大きい問題と思うんです。どなたか、ご回答をいただければと思います。

○司会（石田）

阿部先生、いかがですか。

○北海道大学（阿部）

数をふやす努力は特別なことはしていませんが、とにかくたくさん来ます。大体はがき大の大きさの中に、半分は向こうからの意見、それに答える欄が半分あります。上の欄にびっちり書いておりまして、それだけ書いておきますと、答える方もかなり頭をひねって書くことになります。ことしは大体250通ぐらいですけども、かなりの仕事量になって、大変だと音を上げておりますので、さらにふやそうという努力は余りしたくないという感じがあるわけです。

○司会（石田）

相当北海道大学の場合は、たくさん先生方がかかわられているんですね。

そのほかに何かありませんでしょうか。放送局の方の立場から、こんなではだめだという厳しいご発言がありませんでしょうか。

○名古屋大学（森正夫 学生学生部部長）

何となく今回、ご発言が少ないようですので、一つだけ意見を申し述べます。

先ほど、郡山女子大学の若松先生の方からテーマにつきまして、私の誤解かもしれませんが、全国性、一般性のあるものは中央で、それから、地方の特性に結びついたものは地方の各大学でというお話でございました。

ごく一般的に考えまして、例えば、脳をテーマにした問題についての非常にすぐれた制作は地方で行われておりますし、直接それが主題ではありませんでしたけれども、名古屋テレビさんと名古屋大学の方で放送いたしました原発の問題は全国的な問題でありますし、仮に北海道大学で、例えばロシアとの交流の問題をテーマにした講座を持たれたとしても、それも一般的な問題でありまして、テーマによって、全国的なものあるいは地方的なものというような、あるいは担い手が中央の放送大学とか放送教育開発センター、あるいは担い手が各大学ということは、論理的にはあり得ないと思います。

多分そういうことをおっしゃったのではないと思いますけれども、その点につきましてお話を伺えたらと思います。

○北海道大学（阿部）

その点で私の考えておるところですけれども、これはテーマは、地方でやる場合、地域に根差したテーマは実際あります。北海道の場合、今までのテレビに限りますと、10回のうち6回は地域に根差したものです。あとの4回はかなり一般的なものです。

ですけれども、その一般的なものも、実際には、その地域にいる先生方が担当することになりますと、これが地域のものになるという視点があると思います。そしてこれがまた、衛星の方に細い線が地域から発射している絵になっていたんですね。ですから、そういう意味で、その地域の特性を全国でまた認識するのも、一つの日本全体の豊かさにつながると思います。

ですから、テーマによって地域、地方、全国を分けるのではないというのはまさに同感です。

○司会（石田）

私の方から補足させていただきます。

新潟の場合の脳というのは、地域性の問題ということからいくと外れているのではないかと誤解されがちですが、実は新潟大学には、全国で唯一の脳研究所があるところなんです。ですから、新潟大学の脳研究という地域性という意味合いがあるんです。地域性というのは、ある土地の地域のテーマという問題のほかに、大学の地域性という問題、それから、その大学にしかおられない先生の主任講師による講座という地域性というものもありますので、これは午後のテーマにも関係してくると思いますが、そういうふうに考えております。

○郡山女子大学（若松）

一つだけ、先ほど全国、地方という表現で、大分舌足らずの点がございましたけれども、地域社会のニーズを取り入れてないのでは困るということを強調したかったのも、もちろん、地域で全国的な放送として立派なものは、どんどん全国レベルの放送にすることは当然でございます。どうも失礼いたしました。

○司会（石田）

それではここで、コーヒープレイクにしたいと思います。

休 憩

○司会（石田）

これから後半に入らせていただきます。

鳴門教育大学学校教育学部助教授の久保田慶一先生に、「放送公開講座（ラジオ科目）『都市と音楽』の授業への活用について、予想される問題点とその対応」ということで、ご報告をお願いいたします。

○鳴門教育大学（久保田慶一 学校教育学部助教授）

久保田でございます。よろしくお願いいたします。

資料をぜひご参考にいただいて、こちらの発表を聞いていただくことになると思います。きょう、「都市と音楽」題で発表させていただくとB4のつづりと、B5のつづりの第2

セッション提案・発表事項の4ページ目をごらんになっていただきたいと思います。

大学教授への活用ということですが、今回、放送公開講座ラジオ科目「都市と音楽」は平成4年度に放送されておりました、つい、昨年の12月に放送が終わったばかりでありまして、実際の授業への活用は、平成5年度12月以降の大学の授業ということになっております。

もちろん、私が中心になってテキストをつくったものですから、それまでの実験的に、既に1年半ぐらいにわたって大学の授業での活用を試みておりますので、その活用での段階での問題点を指摘しまして、また、その対応も提案させていただきまして、きょうの発表にかえさせていただきたいと思います。

提案・発表事項の中に問題点を2点ほど指摘させていただきました。私どもの授業で、本学部が教員養成大学であるということから、学部では特に初等教員養成課程での学生100名が中心になっております。それから、大学院でも一般教養の講座で活用を考えておりました、本学は大学院大学がありまして、現職教員の方々が多数占めておる。そういった問題点もといえますか、そういう状態下にありますので、そういったこともご留意いただければと思います。

問題点としましては、既に平成元年度に熊本大学からご報告がありまして、いわゆる放送教材、実際に各回30分の番組をつくっておるわけですが、それを授業で毎回30分間聞かせるというのではもちろん能がありませんし、それでは活用ということにはならないと思います。では、どういう形で利用したらいいのかということが問題になってきます。

それからアンケート調査が、既に先生方のご研究の中でたくさん出ておるわけですが、特に具体的な問題に踏み込んでアンケートを取ってみてはどうか。そのことによって次の授業、あるいは後々の研究成果をまとめる上でも、かなり具体的な成果あるいは方向性が見えてくるのではないかと、2点について、問題点を指摘したいと思います。

きょうは具体的な事例を通して、実際に大学の授業でどういうことをやっているかということも皆さん方に知っていただ上で、最後の対応ということにさせていただきたいと思います。

皆さん方、B4の方に目をさせていただきたいと思います。B4の方では、既に大学の公開講座のパンフレットで、大まかな内容を掲載した文章をそのままそこに掲載してあります。

「都市と音楽」。余り聞きなれないテーマではあるかと思うんですが、最近、特に都市論という形で歴史学であるとか、社会学あるいは建築史、文化史といった分野で、都市というものに問題にされることが多いと思います。特に、私が音楽部の音楽史の専門であることから、こういった都市と音楽というものを結びつけて、一度、音あるいは音楽から都市を見てみれば、どういう姿が浮かび上がってくるだろうということを、この講座では対象にしたのであります。

そこで、いろいろな都市の姿がわかってくるんですが、いろいろな社会学で今出ております、例えば、博覧会場としての都市、あるいは排泄場としての都市、身分階層や家族の錯綜したネットワークとしての都市、物が集合した場所としての都市、ストックとしての都市、消費、流行の都市というさまざまな都市が浮かぶんですが、それを音楽に対応させますと、例えば、さまざまな音が鳴り響いている都市、もちろん、それは音楽でありま

しょうし、また、騒音でもあったりするわけです。そして、多くのコンサートホールもありますし、あるいは音楽学校もあります。あるいはCDとか楽譜等々がはんらんしているのもまた都市であります。

そういった都市と音楽のかかわりを、特に今回はヨーロッパの3都市、パリ、ウィーン、ベルリン、そして日本の2都市、大坂・大阪、江戸・東京の五つの都市を中心に、音と都市の関係を見ていったわけです。

ラジオ講座の内容全13回ございまして、第1回と第13回は導入と結論という形でありまして、第2回から順に、それぞれパリ3回、ウィーン3回、ベルリン3回、そして大坂、江戸各1回という割合でやっております。きょうは特にここで、「第5回ハプスブルクの音楽都市ウィーン」の一部を皆さんに聞いていただいて、ご評価を賜りと思っております。

B4の2枚目をごらんになってください。左側半分は印刷教材として、教育芸術社から出版させていただいた「都市と音楽」の目次の一部を掲載させていただいております。特にきょうは、第5章の第2節部分に、皆さん方よくご存じのヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトのお話になるわけです。特に、第2節の2番目の「《ピアノの国》ウィーン」ということになっております。そのお話にちょうど対応するテキストの部分が右側のページに、特に下線を引いた部分に対応する説明になるわけであります。

実際の大学の授業では、私はこと細かに説明するわけですが、ここで一つだけ、知識として知っていただきたいことは、モーツアルトが1756年にザルツブルクという町に生まれたことは皆さんご存じであろう。そして、ザルツブルクで宮廷の音楽家として活躍するわけですが、1780年にウィーンの町にやってきまして1791年に没するまで、このウィーンで生活をしていくわけです。それまでに、彼がウィーンで最初に就いた職業は、実はいわゆるピアニストとしてあるいは作曲家として、自分の曲を書いては演奏会を開いて、それで収入を得て生活をしていたということが話の中心になってくるわけであります。

それでは実際、大学の授業ではこのテキストだけでは不十分になりますので、スライドあるいはレーザーディスクを使うことが多いわけですが、きょうは、スライドで息抜きといいますか、ザルツブルクとウィーンの、モーツアルトと関係のあるところを少しごらんいただいて、それから放送教材を聞いていただくことにしたいと思います。

[スライド]

これがモーツアルトでありまして、大礼服という非常にきれいな服を着ておりますけれども、これはマリア・テレジアから6歳のモーツアルトに贈られたものであります。

[スライド]

これは晩年のモーツアルトの肖像画でありまして、左下の半分が破損しておりますけれども、真作でありまして、モーツアルトを描いたものであることは間違いございません。

[スライド]

これがモーツアルトの一家でございまして、ピアノを弾いている男がモーツアルト、手前にいるのがお姉さんのナンネル、バイオリンを持って立っているのがお父さんのレーオポルト・モーツアルトでありまして、彼がバイオリニストであったから、こういう形になっている。それから、肖像画になっておるのがお母さんです。この時点で母親は既に亡くなってお

りますので、こういう形で肖像画の中に入っているというわけであります。[スライド]

これは、ザルツブルクのゲトライデガッセ中央通りにあるモーツアルトの生家であります。

[スライド]

これがモーツアルトの生家で、日本でいう4階です。当時のモーツアルトの家になって、使っていた台所であります。

[スライド]

博物館になっておるんですけれども、そこで、当時モーツアルトが使っていた楽器であります。これも本物でいございます。

[スライド]

モーツアルトがウィーンにやってくるわけなんですけれども、ウィーンの象徴と言われておりますシュテファン寺院です。モーツアルトの結婚式もこちらで行っておりますし、あるいはお葬式も、横の小さな礼拝堂で行われております。

[スライド]

これは正面から撮っております。

[スライド]

これがシュテファン寺院の入り口の上にありますオルガンでございます。

[スライド]

これが反対側にあります礼拝堂の祭壇であります。

[スライド]

これが、マリア・テレージアあるいはヨーゼフ2世の夏の離宮でありましたシェーンブルグ宮殿でありまして、モーツアルトも何度かここに訪れて、演奏をしております。特に最初の、モーツアルトが6歳で来たときには、マリー・アントワネットの前で転んでしまって、マリー・アントワネットがモーツアルトを抱き起こしたというエピソードが残っております。

[スライド]

これは前にありますグロリエッテという丘から見たところです。

[スライド]

これはシェーンブルグ宮殿の真ん中にあります噴水であります。

[スライド]

これが今の丘になりますグロリエッテということになります。

[スライド]

これはモーツアルトとは関係ないですけれども、ウィーンで19世紀に建てられました当時の宮廷劇場、現在は国立歌劇場であります。

[スライド]

これはコクランドの公園であるわけですね。

最後に、放送教材のちょうどその部分を聞いていただいて、終わりにしたいと思いましたが、私の連絡の不都合でありまして、ちょうどその箇所の部分を用意してあったんですけれども、巻き戻されたみたいなので、残念ながらお聞かせすることができなくなりました。

最後のまとめに入らせていただきたいと思います。

B4の最後はアンケートの調査でありまして、こういったモーツアルトの生地ザルツブルクとウィーンの町をスライドで見ましたが、今最も印象に残っていることは何ですか。ザルツブルクやウィーンの町について、どのような点について詳しく知りたいですか。あるいは放送公開講座の一部とモーツアルトの曲を聞いてもらいましたが、町の様子をスライドで見たことは、放送を聞いて理解することに役立ちましたか。あるいはウィーンとモーツアルトについて、ほかにどのようなことが詳しく知りたいですかといったアンケートを取ることで、こちらの聴取者の理解あるいは今後の授業の際の準備の上に役立ていきたいと思っております。

以上で終わらせていただきます。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

それでは続きまして、熊本大学教養部教授の今江正知先生から、「テレビ科目の教養部総合科目への利用とラジオ科目の一般教育科目への利用」ということで、ご報告をお願いいたします。

○熊本大学（今江正知 教養部教授）

華麗なスライドの映った後で、こういう人相の悪いのが出てまいりまして、そして、スライドを全然用意していなくて、明るいままで顔をさらしてしゃべるのは少し格好が悪いことです。それからもう一つは、ずっときのうから、放送というものの非常に大きな広がり、その中のテーマということを中心にたくさんのお話があったのに、私は授業への活用ということで、教室の中へ潜り込んで学生の顔を見ながらというところに入っての話ですので、感じが違うことになるかもしれません。

今まで、さっきのときでも熊本大学での実戦報告を引用していただきましたけれども、放送講座を授業の中に使おうという一番もとになりましたのは、昭和60年に「水と人間」というテーマで、人間と水との関係を改めて日常生活の中から問い直しをしようということでした。大変手間をかけてつくったので、そのままお蔵にしまうのはもったいない。何か使いようがないか。熊本大学では3年生に開講しておりまして、年間通して4単位の講義です。その4単位の講義に「水と人間」がそのまま使えないか。そうすると、放送教育講座そのものが、そのままきれいに単位化された形の授業への活用になるという発想で考えました。

それからもう一つは、きょうも双方向はがきということで大分お話が出ておりましたが、放送のやりっ放しで、どうやってみんなが受けとめてくれたかというのが非常に心配なわけです。ですから教室の中へ取り込んで、ある学生に無理やり見せて、その反応をつかまれば、反応というのは割と簡単につかまるのではないかという大変イージーな発想です。それで、総合科目でこれをやりたいという話をいたしました。

ただ、1年間通してビデオを見せて、それをもとにして講義をするのは抵抗があります。何となく視聴覚教材云々というのは、見せるのと大体学生は喜ぶんです。これは小学生でも喜びます。だけど、喜んで「わかった」と言うけれども、本当にわかっているかどうかというと、何となくうさん臭いところがある。何となく本当にわかったのかどうか気になるこ

ろもある。何か映画で見せて、お茶を濁しているという批判もある。

そういう中で試行的にということで、総合科目の委員会でも認めていただきました。原則として13回ある。そして4単位の講義は年間30回ある。ただし休みがあるから、30回とれませんで、大体25回ぐらいです。26回とれるとすれば、一つの放送に関して二こまの授業がとれる。だから、二こまの授業の最初のときに見せて、その次のこまで話をするとおさまらないかということで、試行的にということで認めていただいて始めました。

熊本大学では、今は90分になっておりますけれども、当時は100分が一こまでした。大体そういう発想で始めたものですから、学生に45分のテープを見せた後に説明しますから、30分ぐらいの時間があります。ですから、30～40分かけて見たものをまとめるという作業をさせました。

学生にしゃにむに書かせると、学生は感じたことを書くんです。「おもしろかった」というのはだめ。「何しろ考えことを書け」と意地悪を言いました。無理やり書かせることをする。これは双方向性ということで、彼らの反応をとりたい、確かめたいというのが一つ。それから、そうやって押さえつけないと、一生懸命見ないであろうという感じもありました。

ただ、思いがけぬ収穫になったのは、この無理やりに書かせたことがえらいよかったということです。というのは、学生に書かせて取り上げます。そして、それをどう使うかは、13回の講義をそれぞれ担当した先生方にお任せしましたけれども、原則として、何しろ見せて書かせることを先にしてください。そして、その次の授業は、学生の書いたものをもとにして講義を広げてしていただいてもいいし、体系化した形でしていただいてもいいし、学生の疑問なり何なりというところをうんと突っ込んで話をしていただいても、それはどうでも結構です。ただ、そこの先を広げ、深めることをしてくださいということにしました。

私が一番やりましたのは、学生の書いたのをぱっと読むわけです。B4の紙を配って、それにぱっと書かせます。それで横に手帳を置いて、書かせたのを見ながら、気になることが書いてあるのをみんな、ぼんぼん紙に書き出していきます。というのは、添削して返そうかということも考えたんですけれども、添削して返すと大変ですから、添削して返すよりも、むしろ彼らの誤解していること、変な勘違いをしていることを全部メモ書きしてから、その次の時間に1時間以上かけて、「おまえたちは、こんな浅い見方しかできないのか」、「なぜこういう誤解をするのか」と、わいわい悪口を言う形を私自身が一番やりました。そうじゃない形でされた方もいろいろあります。

そして1年間終わってアンケートを取ってみると、「この書いたのがきつかった」とみんな言います。ただ、書かせているうちに思いがけぬことが見えてきたのは、彼らは書くのが非常に苦手だ。回答欄がきちっとできているのに答えを入れるのは上手だけれども、ぼかっと見せたものを書かせると、ほとんど迫力がない。そして、「大体見ながら、聞きながら、考えながら、メモをとりながらということは一週間にまとめてできますか」と言うから、「それをするのが人間」と言ってまたばかにしまして、そんなようなことをやりながらということをやってきた。

ただ、これが有効だということになって、単位を出すことも問題点となりましたので、その後でできました「音と人間」は、教養部の先生が主任講師をされたものですから、教養部

の中にまた入れて開講していただきました。

それから、ことしは逆に、総合科目の方で講義をしていた、「熊本城を通じて日本の歴史を見る、日本の城を見よう」というキャッチフレーズをつくりました「熊本城」あたりも、一つの地域からの視点だとは思いますが、それも放送講座でつくったから、逆にまた、総合科目の方に取り返していこうかと思っています。

ただ、これをやってきましていろいろ考えました。というのは、教室の中で学生たちもそれを見ていると、いろんな面が出てきます。例えば、テキストと番組との関係も、きのうから大分話題になっておりました。テキストは学生たちには配りませんでした。というのは、テキストの残部がないという単純な理由が一つ。それから、テキストを全部プリントにして配るのには多過ぎるし、かえって講義をするときには、テキストという程度でまとめるものよりも、1回の講義でどういう話をするかでの話での資料の方がいい。ですから、図表などを主として、それに資料を追加して配っていた先生が一番多うございます。そういう形で、次のときの講義をするということをやっていく。

そうすると、テキストと番組と講義は結局、全部違うということが、変に開き直った格好で見えてまいりました。やっぱり別のものだと思います。

ただ、そういう形でずっと続けていて、このごろ特に落ち込んでいますのはこの何年間か、学生たちは、書くのが下手なのがますます下手になりました。これ、どうなっているんかと思うくらい書けません。B4の紙に30分ちょっとかけて書くときに、紙が埋まらないんです。

「書けないというのは、頭の中が空っぽだ」と悪口を言います。それでも出ません。それから、「講義というのは、顔をみながらしゃべるから、こうこうと話をとめたときの場所から、受けている学生たちは条件の違う話を聞くけれども、テレビは全く平等の同じ画面を見て、同じ情報が提供されているんだから、それをいかに上手にまとめるかということは才能である。それができないやつは頭が空っぽである」、そこまで言います。それでも毎年、毎年、どんどん書けなくなってきました。

作文教育がどうこうということを言いますが、本当に作文教育はどうするべきか。うれしかった、楽しかったという感情のところで、何かあるもの、見たものをきちんとまとめて、相手にわかるように説明するという作文をどうすべきかということを、このごろ一生懸命考えております。ただ、余りうまくいきません。

話が脱線しましたがけれども、ただ、授業への活用というときに、それを単位を出すもので考えるとなると、どうするかということだと思います。レベルがどうかということも、いつもここでいろいろ問題になります。その大学の単位としてとられるものが、ビデオのこの番組だけであるかないか。これはないと思います。それだけのものはちょっとつukれないと思います。ですから、あの後にくっついて、学生との間のやりとりがある部分がないとできないんじゃないか。

その意味でことしは、ラジオの方でちょっと変わったことを調べていただきました。というのは、ラジオの方では「熊本の文学Ⅱ」というのを使っていて、学生たちにテープだけを聞かせて、そのところの試験をしていただいた。大変だったそうですけれども、熊本大学の1年生52人に試験をしたら、38.8という点数だったそうです。教育学部の3年生は

いろんな専攻のがまざっておりまして、84人ほどにやったら46.7。ただ、これもテープを聞かせた後で、テキストを使ってその部分の講義をして、学生の顔を見ながら話をさせていただいたら、38.8が68.5、46.7が71.1になったそうです。ただ、ある私大の国文専攻の国文科の3年生はテープだけでも52.7、それが講義をした後では、74.4という数字が出ております。というように大変手間がかかる形で試験をしていただきました。

そういうことから考えて、実際に「水と人間」の方でもやっていますのは、クラブ活動でよそに出かけたからとか、休んだからということで、「この前の講義でやったときのテープを」と言って借りに来ると、今、学生たちはビデオをたくさん持っていますから、ぼんぼん貸してやります。そして、「貸してやったところをもとにして書いてこい」と言ってまとめを書かすことができます。という格好にすると、その次のときに穴埋めができる。ラジオの方でもそういう形で、休んだ者に活用すると、今度どんな問題ができるかということでの、また次の計画を考えといていただいておりますけれども、そういうような形での使い方もあるんじゃないかと今考えております。

今の学生たちは、これは全く、本来の趣旨から違ったことで気がついたのは、本当に学生たちが物を書いてというか、物をきちっと説明できないということの重さです。私は植物屋ですけれども、学生を山へ連れて行って、山にほうり込んで追い込んで、「この植物をとってこい」と言って見せたら、大抵それと同じのをとることができます。ただ、それから「どうしてこれだとわかったか」と聞く、もごもご言って話ができない。映像と理屈のしゃべる云々のところというものが、ぱっと目で見てわかるものと、口で説明できる部分と一緒に要るし、大学教育の中で要るのはその両方じゃないかということも、まだ答えが出ているわけじゃないけれども、考えております。

大変荒っぽい話になりましたけれども、今そういうことでずっと継続的にやっております。学生も少し落ち込んできていることも含めて、それから、学生がこのごろ、アンケートを取ったりするとどう反応するかということも、そんな中で後から報告を書くようにいたします。

ただ、学生が、昭和60年につくった番組だと「古い」と文句を言います。確かに古くなった部分もあります。ただ、講義に使うときに、しかも、熊本大学でやっているような形で、1回見せて1回その後使うというふうにするんだったならば、古かったら古かったで、学生が「古い」と言った意見をもとにして、その部分の話をご自分でしゃべればいいんです。というような荒っぽいやり方で今のところ使っております。

まとまりのない悪い話になりましたけれども、時間になったようなので、これで終わります。

○司会（石田）

ありがとうございました。

それでは引き続き、琉球大学医学部教授の平山清武先生から、「大学授業への活用—印刷教材を主として—」をお願いします。

○琉球大学（平山清武 医学部教授）

それでは、ご報告いたします。

琉球大学の場合には8年前から、この放送教育公開講座に参加させていただきまして、そのうちの約半分の4年間ですが、4年前に熊本大学との共同研究で「大学授業への活用に関する研究」を3年間、昨年は単独で、きょうご報告することになるわけでございますけれども、授業への活用に関する研究ということで一貫して取り組んでございます。

公開講座委員会というのがございまして、琉球大学の場合は、沖縄県が代表委員として、琉球大学と沖縄大学、国際大学の委員の方も参加していらっしゃるわけですが、実際には、テレビ、ラジオともに琉球大学が主として担当しております。

[OHP]

本日お示ししますのは、主にラジオに使った部分でのアンケート調査でございます。平成4年度のラジオの方の「コンピューターそのしくみから応用まで」に関しましてはお手元にB4の資料が届いているかと思いますが、理系科ということで、番組制作の時点からいろいろ不利益があるという感じがあったようで、放送中も、なぜテレビでしてくれないかという声もあったかに聞いております。

調査対象は高学年の3年生ですから、専門に入った学生の合計177名について、テキストをみて持っております。そして、授業、テープを聞いて、それに対する補足説明ということでやって、アンケート回収ということで進んでおります。私は主任講師をしておりませんが、そういうようなことをさせていただきました。

視聴した放送教材とその専門性はかなり一致する、合わせて80%を超えておるわけでございます。つまり、本日お示ししますのは、一般教養としてよりは、専門教育の導入部分でどうかという評価の報告になるかと思えます。

[OHP]

すべて13回分をしたわけではございません。13回の中で、コンピューターの基本理論、仕組み、ベーシックによるプログラミング、あるいは情報設定座標等、ファジーを使って考えるということで、印刷教材の方から評価をお示しますと、充実していると肯定的な評価は60%ぐらいになっておるわけでございます。どちらともという評価も約4分の1あるわけでございますけれども、大体半分以上は、印刷教材に関する評価はかなりいいところへいっていると思っております。

[OHP]

放送教材もテープを聞くわけでございますので、あらかじめ配付してあるテキストと放送教材で適切に関連しているということも、80%近い評価を得ておるわけで、よく関連してできているということでございましょうか。

[OHP]

印刷教材は、放送教材に非常に役立ったというのも80%前後あろうかと思えます。

[OHP]

そういうわけございまして、やはりテレビの方がいい。つくる方もあるいは聞く方も、放送教材としてはよろしいかと思えますけれども、印刷教材と相補って効果的であると思うわけであります。印刷教材がない方が学習にむしろ効果的であるという設問に対しては、そうは思わない。やはり印刷教材は必要だという評価が多かったとして判定できるかと思いま

す。

[OHP]

それでは、印刷教材だけではどうだろうということでございますけれども、これに対しましては、当てはまるというのはむしろ少ない。40%を超えてはおりますけれども、どちらとも評価が得られない。かなり一般の場合には多くなっております。

[OHP]

結局、放送教材を聞いてからの合わせての判定ということになりますけれども、大学の教養課程の単位としての認定に対する学生の評価でございますが、50%前後が積極的な肯定。教養課程としての単位。しかしながら、3年生で専門課程に入っているわけですが、教養課程に対する評価に比べると、専門課程としての評価は、この辺は説明の仕方にもよりますけれども、導入部分としては必要だろうと思っておりますが、これはやはり教養課程よりは、専門課程の単位としては若干評価が落ちるということでございます。

[スライド]

まとめますと、専門的であった、あるいは適切であって、レベルはどうか。機械学の講義としてはどうだろう。専門課程に単位としてどうだろうということで、専門課程の単位として認定できるものは40%を切っておりますが、レベルについては、必ずしも低い評価ではなかった思います。

これは印刷教材に関する部分でございますけれども、これに対しましては、放送教材との補完として適切にされているということと、やはり合わせてということであれば、質問の内容が違いますけれども、50%から75%前後ございまして、かなり印刷教材に対する評価は高いと見ております。

[OHP]

ところで、ここにお出ししましたのは、3年間の共同研究の中で、ラジオ部門で理系の放送教材を作成した部分と比較してみたわけでございます。「コンピューターそのしくみから応用まで」は平成4年度。「思春期の心とからだ」は89年。左の縦書きは91年の部分でございますが、やはり本年度の部分は、専門性が一致している部分が高いということもございます。

[OHP]

これを見ていただきますと、内容が専門的であるということは、私が主任でやった1系理学系の「思春期の心とからだ」が一番低いわけでございますけれども、レベルに関する評価はちょっと高い。専門課程単位としての認定は、昨年の「乱れ物理学」のラジオ放送が一番評価が高くなって50%。あとは40%ちょっと切っている部分があるわけでございます。教養課程としての各単位認定はこれより高くなっております。

印刷教材に関しましても、3年度をまとめてみますと、印刷教材だけで十分学習可能につきましては50%を切っている。「思春期の心とからだ」は60%を超えておりますけれども、そしてまた印刷教材の方が有効。必ずしもそういうような評価は過半数というわけにはいきませんで、やや若干低いという評価を得ておるわけでございます。

結びでございますけれども、こういう会に毎年報告している中で、沖縄の場合は、やはり

沖縄の地域性に大変こだわる。それから、あとの印刷教材を含めまして、主として大学の教養課程での利用、あるいは専門課程の導入部分での利用ということを、基本的に8年前に参加した時点から挙げておりました。それをずっと守ってきておるわけですが、それでも、本日お示ししました以外の教材につきましても、ほかの大学もそうだろうと思いますけれども、それぞれ実際には、個人的には大学の授業に活用されているわけです。

ただ、琉球大学は8学部ございます。平成4年度で一応一通り、医学部がテレビとラジオを作成した形になっておりまして、今後はどうするかということになろうかと思いますが、つくる側も企画する方も、印刷教材の方の放送関係の方も、ラジオの方はつくりにくい。かなり苦心する部分がいろいろあるようで、今後は一巡したところで、大学公開講座委員会でも、テーマに沿った、内容によって、テレビあるいはラジオを利用するという分け方。この辺は皆さんも同じだろうと思いますけれども、そういう考慮が必要じゃないかと思っているわけです。

もう一つ申し上げたいのは、地域性のことに关しましては、沖縄県は日本で最大の亜熱帯といえますか、私としては熱帯地域だと感じますが、そこに地理的な特徴、基本的特徴。それから、平成4年度のテレビの方にありますような沖縄文化とか、沖縄かぶりとしたいろんな特色のある文化、その他があらうかと思いますが、今後まだまだ問題点もたくさんあるわけで、沖縄でしかできない教材、しかも、専門性あるいは学術的にも、実のある教材がつかれるんじゃないかと思っております。それがまた、他大学でも利用できる部分があるんじゃないかと思っています。

実際に熊本大学との共同研究の中で、「琉球舞踊の世界」を授業に活用していただいたこともございますけれども、かなり高い評価を得られたということもございまして、それから一昨年の「沖縄の自然：地形と地質」も、しかるべき大学では利用されて、活用されているということをお聞きしております。沖縄の産業あるいは沖縄の農業ということも、そういう意味では、沖縄の理解といういう単純なものではなく、学問的な意味でも、貴重な映像が残っていると思っていますので、その辺が地方の大学としての、放送教材の作成の一つの目玉になるんじゃないかと思っています。

そしてまた、単なる一大学の普通の公開講座の教材じゃなくて、言うなれば、放送大学講座の受講生に対する単位の互換性を含めて利用できないか。あるいはつくれるんじゃないか。そういう需要に応ずる作品がつかれるんじゃないかと思っております。以上です。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

それでは最後に、新潟大学教育学部教授の生田孝至先生から、「放送利用の大学公開講座の大学授業への活用に関する研究—単位化に関する研究—」として、ご報告をお願いします。

○新潟大学（生田孝至 教育学部教授）

私どもは放送教育開発センターと、本年度から「放送利用による大学公開講の単位化に関する調査研究」というタイトルで、新潟大学教育学部で私が担当し、放送教育開発センターで石田先生という形で研究を始めさせていただきました。

[OHP]

従来私ども、たくさんの番組をつくっているわけですが、それにかかる費用はかなり膨大なものがありまして、大変貴重な番組がそれぞれ、参加大学のもとで開発されているわけです。これを何とか共通の財産にできないのか。高等教育、特に大学の中で活用する方途はないのかということを課題にして研究を進めていこうということでございます。

研究の目的といたしまして幾つか挙げてみたんですが、一つはここにお示ししましたが、既存の大学公開講座のリード教材を、このたびは複数の大学で授業に活用していただいて、そこでの内容、授業での運用上の課題というものを検討してみようということでございます。

ただいまの発表の中でも、既に熊本大学、琉球大学の中でのものもございましたし、その問題点あるいは有効性をご発表になったところもございますが、私どもが今考えておりますのは、そういうものも含めながら、複数の大学で授業に活用してみたい。こういうことがどの程度現実として可能であるのか。そういうことを一つ、対外的にしてみたいと思ったことであります。

それから二つ目は、大学における共通教材の特性、つまり、現在我々が参加大学で開発しました教材が、大学での共通教材として活用できるとするならば、あるいはその特性的なものを分析し、あるいはどういうところに問題点があるかというものも含めまして、共通教材開発の方向、あるいは方途というものを研究する一つの基本的な資料が得られないか。

こうことの二つを目的にいたしまして、本年度から研究を開始させていただいているところでございます。まだ1年目でございますが、これからご発表させていただきますものが中間的な発表でございますので、少し物足りないところがあるかもしれませんが、中間的な発表であるということをご承知いただいて、お聞きいただきたいと思っております。

[OHP]

現況の方法といたしましては、一つ目がまず、基本的に協力大学への依頼を説明という形でお示しいたしました。後でご紹介いたしますが、新潟大学歯学部で撮影されました番組を使っていただくという形をとりましたものですから、以下のような形で、実は協力大学を選定させていただいたわけです。

北の方からいきますと、北海道大学歯学部、東北歯学部、新潟大学歯学部、徳島大学歯学部、鹿児島大学歯学部、琉球大学医学部というふうに、全部で六つの大学にそれぞれ出向きまして、先ほどのような目的をお話しいたしまして、こういう形で歯学部あるいは医学部での授業の中で、このビデオを活用いただけるかどうか。そういう依頼をしています。これが5月から9月の予定でございます。

私も専門が全然違いますし、この領域に足を踏み込むことは大変勇気の要ることでありまして、ほとんど不可能ではないかと最初は思ったんですが、先ほど述べたような形がクリアされないことには、これほど多くのお金と努力を傾けた教材がそのまま終わってしまうのは、何としてももったいないということで、最初の試みとして、それぞれの大学に出向きまして説明をさせていただきました。

本来は、本年度説明をして、それぞれビデオあるいはテキストをごらんいただいて、来年度から活用ができるかどうかを検討していただいて、1大学1学部でもそういうものがあつたら、大変うれしいと思っていたんですが、米印でお示しいたしましたように、大変急な中

を、ご自分のそれぞれの大学で既に授業計画が決まっているにもかかわらず、私どもの申し入れを快くお引き受けいただいて、試験的にそれに取り組んでいただきました。

平成4年度、米印が二つのところがございます。私どもは当然でございますが、ここに挙げましたうちで鹿児島大学歯学部は、実は、この放送公開講座については参加していない、非参加の大学でございます。ほかのところはみんな参加大学ですが、今回私どもは、非参加大学にも働きかけまして、今まで放送公開講座というものを活用し、あるいはそれに経験のないところで、こういうものをどのように受けとめていただけるのか。このことにもずっと関心がありましたので、鹿児島大学歯学部をお願いをいたしました。大変快くお引き受けいただきました。それから、先ほどご発表いただきました平山先生を主として、琉球大学医学部の三つが平成4年度に実施いただきましたし、それから、来年度は北海道大学歯学部、徳島大学歯学部で実施していただくことになっております。

引き続き、今年度もやっていただきました三つの大学は、それぞれまた来年度もお願いするという格好になりまして、神戸大学歯学部は体制上の問題、それから、中の番組の活用の授業の組み方の辺について、今回は難しいところがあるというところで、実質的には実施いただかなかったんですが、ほぼ私どもがお願いに上がった大学にこういう形で引き受けていただけたことは、大変驚きを持って私どもは受けてとめていたわけでございます。

[OHP]

こういう方法で実施をさせていただきましたが、具体的にどういうふうに行ったかということの一つずつ見ていただきたいと思います。

まず、実際に後期の授業からとっていただいておりますけれども、既存のビデオ教材セットを、単位化の目的で大学の授業で活用する。つまり、シリーズでつくられたものの中から、1本とか2本をその授業の中で使うということではなくて、ぜひセットとして20本の番組をそのまま単位化と結びつける中で考えて、見て活用していただきたいという大変無理なお願いを実はいたしましたわけでございます。

実際に行いましたのは、ビデオを実際に授業で活用していただきまして、その後、学生を対象に番組はどうであったかとか、テキストの理解はどうだったか、授業の形態はどうであるか。あるいは内容の専門性等について質問し、調査を行う。これは学生向けでございます。

それから3番目は、全部の授業が終了した後、この授業を担当した先生方に、ビデオを使うという形の授業はいかがでございましたか。それから、見ていただいてお使いいただいたビデオ、映像教材は、運用上も含めて、共通教材としてどういう可能性や問題があるのか。これを直接伺って、面接によってご意見を集めさせていただいております。これはまだ途中でございます。

実際に使っていただきました教材は、新潟大学の放送公開講座が、平成2年度につくりました全19回の「口の働き・歯の役目」というビデオ教材でございます。

今、学生のアンケートが全部ではございませんで、一部返ってきておりますが、その中間的なものとして見ていただきたいと思います。対象とした学年生はほとんど2年生です。今、分析の対象に入っておりますが、鹿児島大学と新潟大学の学生で、琉球大学につきましては、データが送られてきている途中でございまして、この中には入ってございません。3年生も

ちょっとございますが、これは新潟大学の分で、ほとんど2年生です。それから、1年生も若干ございます。全部で462名だと思います。

[OHP]

番組そのものの理解についてざっとご紹介いたしますと、見ていただきました番組が理解できたかどうか。ビデオそのものが53%ぐらいですから、半数以上がよくわかった。いわゆるよくわかったといいますのは、ほとんどの学生が、内容はよくわかったと答えていることがわかると思います。

それから、テキストを配付して見ていただいておりますが、これにつきましても、よくわかったというのは28%で若干少ないようですが、ややわかったと入れますと、ほとんどの学生がテキストそのものも、そう大きく問題ないと見ていただいているようであります。

[OHP]

教官とビデオの組合わせて。表現がわかりにくいかもしれませんが、実は30分番組でございまして、実際にビデオを見せた後、先生が講義をされるという、教官とビデオの組み合わせという授業のスタイルを聞いてございます。その組み合わせはどうであるかという、大変よいというのが4分の1ぐらい、かなりも含めて、こういう形であります。無回答が多くなっておりますが、多分こういう形式の問いが、1年生、2年生にとってはわかりにくかったのかもしれません。

ビデオだけで内容がわかるかどうかということも聞いたんですが、かなりビデオだけでもわかるという印象を学生は持っていることがわかると思います。それから、教師の講義なしで、ビデオだけでわかるのかどうかという話ですけども、理解できるという人が53%いますが、やはり先生の講義も必要なんだというところもありますので、この組合せという考え方も、これからの授業の形としては検討していく必要があると思います。

[OHP]

担当者教師の講義は必要なのかどうか。つまり、ビデオの中のビデオティーチャーいいですか、テレビティーチャーと申しましょうか、そういう先生とは、講義を実際に担当している先生もありますので、教官の講義は必要かどうか。余り必要がなく、ただ、先生の話がなくてもいいのだというところがあって、ビデオそのもののわかりやすさというものも、こういう形であらわれていると読み取れるかもしれません。

[OHP]

ビデオの内容について、専門的かどうか、一般的かどうかということですが、専門的という割合もかなりありますが、一般的というのかなり強うございます。これは、1年生と2年生ということで、もう少し学年による考查をしないといけないと思うんですか、こういう状況でありました。

テキストの内容そのものにつきますと、先ほどよりも専門的であったという内容が出ております。実はこのビデオをごらんになって、100点満点で何点ぐらい上げられるか。100点満点にすると、このビデオは何点かということをやりましたら、かなり山が出ておまして、90点を中心に、80点から90点。100点とつけてくれた学生もおまして、比較的高い得点と云えることができます。

では、テキストはどうかといいますと、こういうふうな形で、ビデオ内容よりはやや低いわけですね。これは専門的であったというところとかかわるかもしれませんが、それも80点を中心にしてこういうふうにとすることで、ビデオ、テキストともに比較的高い評価を学生は与えていることがうかがえると思います。

今、急ぎながら紹介させていただきました中でございますか、まず一つは、いわゆる参加大学以外の、具体的には鹿児島大学にお願いをしに行きまして、こういうビデオ教材あるいは授業への活用について、大変驚きを持って、あるいは大変好意を持って受けとめていただきました。その中から、いわゆる参加大学だけではなくて、最初の加藤所長のお話にもありましたが、参加したいという大学がかなりたくさんふえているようでありますが、非参加大学にも働きかけながら、こういう共同研究あるいは共同開発というものを、もう少し積極的に働きかけていく必要があると思いました。

とりわけ、直接出かけていきまして、こういう内容についての説明、あるいは大学の参加を促すことによりまして、活性化を進めるのに大変役に立ちますし、全国の大学に教材を開放するという意味においても、ぜひ非参加大学を一つの対象にして、これを拡大していくことが、大変重要な問題ではないかという印象を受けました。

それから、共同利用あるいは共同開発と申しましょうか、これは共同研究にもかなり加わってくると思うんですが、例えば、今回参加して面接をさせていただいた先生方の中で、今回は歯学部でございましたが、大学の授業の中で、こういう映像教材を組み入れることについて、従来は余り大きくこういうものをやっていなかった。しかも、シリーズ物でこういうものを入れることについて、大変ご苦労していただいたわけですが、その中を通して、従来の講義の仕方というものにこの映像教材を組み入れてやることは、ある意味では、かなり革命的な意識変革を大学の教官にもたらす。ある大学の先生は、これを使ってやってみて、従来の講義をかなり組みかえる必要がある。つまり、大学での教育方法の発想の転換、仕組み、方法、すべてにわたって、かなり大きく組みかえが要求される事項である。これから新しい時代に入るわけで、こういうものも通しての授業の新規計画がかなり促されたということも積極的に評価して、やらせていただいた先生がいらっしゃいます。

それから、従来、活字教材中心としての授業であったけれども、このような映像教材を中心にしながら、こういうものと活字教材をセットにしたがらの授業展開という中で、特に映像教材を用いた場合、その評価をどういうふうにしていったらいいのか。確かに学生はわかるし、理解はできる。しかし、従来の大学人がやっていた評価方式ではうまくない。つまり、今回の取り組みは、評価をどうするかについて、根本的に考えさせてくれる機会であったということが指摘されました。

それから、今回は一部ですけれども、担当の新潟大学の主任講師が直接出かけて行って、講義をしていただく機会があったんですが、こういうものを通して、教材の研究だけではなくて、教官の交流というものが、これによって活性化されるんじゃないか。ぜひそういう方向もこれから検討してほしい。教材の研究、研究並びに公開、研究の公開だけではなくて、教官の交流というものが一つ重要になってくるということが言われておりました。

まだ途中ではございますが、共通教材をこのように開発するというところの意については、

どの先生方も、大変積極的にその意義を認めてくださいます、1大学1学部ではなくて、全国的なネットでそういうものを研究を共同できれば、それはありがたい。しかし、1大学ではそういうものはできないので、どこかがその主になって、高等教育のこういう教材の必要性、あるいはチャンネルをきちんとつくっていただけたら大変ありがたいということで、ある意味では、共通教材の開発、利用というものについて、私たちが想像した以上に積極的な意見をいただきましたし、またそこでも、今回、私どもがやりましたのは、放送公開講座という一般を対象につくったものをお見せしたわけですが、それについても、もうちょっと専門的な内容で、統一の教育教材が作成できないか。そういう問題も抱えておりまして、幾つか課題が示されたということでございます。

以上のようなことが、今回の研究の中間的なものとして、ご報告していただければありがたいと思います。

○司会（石田）

ありがとうございました。

時間も大分も切っておりますので、すぐこの後、協議になりますが、放送教育開発センターの廣瀬先生から、コメントをいただきたいと思います。

○放送教育開発センター（廣瀬洋子助教授）

大分時間も押してきましたので、簡単に述べさせていただきます。

各大学の先生方たちの心のこもった、そして、非常に厚みのあるご研究に接しまして、大変感銘を受けております。

それで、一つ一つの大学の先生方から、それぞれの問題点を指摘していただいたんですけども、まず、きょうの発表を全部まとめて、何が1点だけ大きな問題になるかということを考えましたときに、結局、この映像教材、音声の教材、こういうビデオ教材あるいはラジオ教材を講義の中でどのように生かしていくかが今後の問題になってくるんだと思います。

そして、それは熊本大学の今江先生がおっしゃいましたように、どうやって生徒たちにそれを伝え、そして、それをどうやってまた講義で補完していくか。特に熊本大学では、無理やりに書かせるという形で、ビデオの持っているものを今度言語化されるというところに、いかに今の学生さんがなっていないかというの、またあらわになったなどというお話もございましたし、また、新潟大学の生田先生がご研究なさったように、ビデオ教材を一つの大学ではなく、複数の大学の共通教材として方向を探った場合にも、結局は、教官とビデオの組み合わせをどういうふうにしたらいいか、そこに突き当たるということが感じられました。

それにはまず、教える側の意識変革。教官側がビデオ教材をいかにその授業で生かしていくか。ビデオをこうやってつくったらいい、印刷共済をこうやってつくったらいいと、私たちはずっと研究してきたわけですが、今度、いかにそれを授業の中に生かして、そして、新しい形の大学教育を発展させていくかというところに問題は集約されるような気がいたします。

特に新潟大学でなさったように専門性の高い、いわゆる今まで教養番組の延長線上にある公開講座ということだけではなくて、リカレント教育とか、また専門教育といったものも、このビデオの学習というのが大きな意味を持つのではないかというご示唆があったんですけ

れども、アメリカの大学の授業内容を聞いてみますと、まず、学生に何冊読みなさいと、一つの授業に10冊なら10冊の本のリーディングリストを渡すとともに、オーディオビジュアルマテリアルのリストも渡すという話を、つい最近、シカゴの大学あるいはハーバードの大学の先生たちにお目にかかったときに聞きました。

ですから、アメリカでは、どんどんこういったオーディオビジュアルマテリアルは、大学の授業の重要な一環として使われているということで、また、それをどうやって使うかといった研究、あるいは単に補完的な意味で絵を見せる、音を聞かせるということではなくて、それを研究というものに組み込んで、どのような形で授業を展開し、また、研究そのものも進めていくのかといったことも、アメリカではどんどん盛んにやっているということを聞きました。

ですから私たちも、そういった点を今後踏まえてやっていったらいいんじゃないかと思いました。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

それでは、時間が迫っておりますが、フロアから何か。

○三河総合教育協会（入江）

きょうの後半で大学への利用ということで、我々どものつくったつたない番組も、大学で利用していただいているというご報告を聞きまして、大変うれしゅうございましたんですが、実は、センターで立てている4本柱のうちで、大学授業に使えるものとは一体どういうものかという視点が、実は私どもの方も含めまして、一番欠けている視点というか、部分です。

それで私どもも、普通の番組ですと、どこの階層にどうやってやるかというセグメンテーションというのは必ず行われてつくられておるんですが、この場合には、対象は大体高校卒の人たちぐらいのところを相手にということが、今一般になっております。実は、大学に利用されるということは、僕らもなかなか使いにくいだろうというところをつくっているわけです。というのは、対象が一般大衆というところに向けてつくっていますから、大学の生徒に一体使えるかということ、全く僕らにはないわけです。

それで、実はこれからは、そういった一般の人もおもしろく、生徒も乗れるものというところが、実験的でも研究されていかないと、なかなか大学の授業では難しいだろうという素人考えでございます。

その一つのことは、前から考えているのは、なぜだという視点ですね。別の言葉で言えば、問題解決型と言うんですか。そこへ到達したのはなぜかという視点というものは、例えば歴史的に見て、コンピューターがどのように使われたかということは私どもも大変理解も早いし、それから一般的な歴史ではなくても、自分史でもいいと思うんです。先生方の今、私はこう考えているんだけど、それには、こういうふうな過程で実験をやり、何かやりというふうにわかってきたという視点が入られて、一般の視聴者も恐らく、大変にこれはドラマチックであり、人間臭いテレビに乗る部分ですね。常套的も部分もあるでしょう。感性の部分もあります。

実は大学では、なぜそうやってきたというところは忙しいものですから、全部ネグられて

いると聞いております。ある放送局センターでつくりました番組で、学生に見せたら、薬の歴史みたいなものが入っていたのが、学校ではそれを教えてくれないということで一番評判がよかったんです。実はその部分が一番ネグられて、今、知識だけ並べられている番組がつくられてきて、先生方もどうするかというところで、大変ご利用にご努力さなってくれて、ありがたいことなんですけれども。

例えば、去年でしたか、NHKが電子立国の今の日本が、最先端のところでいかにリードしてきたところを、中小企業の人たちが偶然に発見したところがみんな重なって今あるわけですが、それをやったら実に評判よかった。僕らも始めてみて、なるほどそういうことだということがよくわかったわけです。これは一般大衆を巻き込んだんですが、恐らく学生も巻き込まれる要素はたくさんあったと思いますけれども、そういう専門家の人たちのご印象だったと思います。

その視点で、例えばどこかで、すべてのテーマでそういうものができるとは思いませんけれども、人文関係である程度実証であるところに到達するわけです。その過程というのは大変に人間臭くて、テレビに乗っていく部分です。その部分が今、全部ネグられてやっておりますので、テキストはテキストで、今書かかれています状態がいいと思いますけれども、あるところは、テレビもそのぐらいの作業として乗せやすいというものはありますから、そういうところ例えばやってみて、生徒のまたデータをとる。僕らが実は、内心じくじたるものがありながらつくっているものもございまして、ぜひ実験的にも、どこかの地区で。学生にも使えるものは、一般にもおもしろいのか。こういう知識の高等教育ものは、両立するところはあるんだと思いますね。その辺のところをぜひこれから、私どもも協力させていただきますので、実験的にもいいですからやっていただければ、僕らの参考になると思います。

○司会（石田）

ありがとうございます。大変示唆に富むご発言だったと思います。

そのほかどうぞ。

○信州大学（丸地信弘医学部教授）

私は、医学部で公衆衛生を担当しているものです。まず一番初めに申し上げたいことは、私も実は、来年度にテレビの方を担当することになっておりまして、きょうも、初めてこういう会合に出させていただいて、何人かの先生方から非常に貴重な意見をいただいて、それ自身は非常に勉強になったんですが、きょうここへ出席して一番残念だと思うことが一つございます。対話なき集会だという感じがします。もう少し討論の時間をたくさんとっていただきたいということを申し上げたいし、それがなければ私どもが、大学にしろ公開講座にしろ、地域の人たちと相互に学習する機会のときに、結局、対話の姿勢を持たないんじゃないかということが一番強調したいのであります。

そういったことを前提に、私どもがきょうの先生方のお話を伺って感じたこと、それをまた来年度に生かすべく、ごく簡単に意見を申し上げたいと思います。

私は、5年前ほど前に信州大学に戻ったんですが、そのときから、従来のいわゆる講義中心の教育ではなくて、対話を中心とした教育に切りかえました。人間というのは、日ごろやっているところと違うことがあると、非常に学生も教官も反対をいたします。そのアレル

ギーが5年たって、ようやくなくなってくれました。そこで私どもがずっと基本にやっていることは、きょうも先生方、いろいろなお話をなさって、私も、テレビもラジオもビデオも教材に使うんですが、そんなに長いこと使わない。それはあくまでも討論の素材であって、そこを余り長いこと見せると、討論の機会がなくなってしまうので、少なくしております。

それから、学生諸君には必ず毎回、熊本大学の今江先生と同じようにレポートを書いてもらっております。非常に辛いことですが、これは自分たち自身の生涯研修ですので、それに講師に当たった先生が必ず全部見直しをして、次の週にはフィードバックをするということをやっております。これは大変なことですが、これをやらないと結局、我々自身が教育をサボることになりますので、それをやっています。

それから、これは今後も続けていくし、来年度の公開講座にも、私はぜひ入れていきたいと思いますが、講義のために先生がそこにひょいと顔を出すだけではなく、原則として前日までには、学生に資料を配付して、講師の先生が5～6人の学生に来てもらって、臨床講義と同じように事前に打ち合わせをして、うまくいったときには学生に、今度はレクチャーになっていただいて、僕らは単なるチューターということまでやっておりますし、ロールプレイなんかを入れると、非常に教育効果が上がると思います。

そういうときには、さっき熊本大学の今江先生が言われましたが、日ごろいいかげんなレポートしか書かない学生でも、相当思い切ったことを書いてまいりますし、私はその指標として、単にどういう感想であったかというだけではなくて、イラストも入れてもらうようにしています。そうすると、日ごろ書いていない学生でも、そういうイラストを入れてくるようになったら、これはしめたものだ。それを一つの指標としておりまして、私は教育活動の評価を、必ずしも数量であらわすよりも、まずその前に、私たちがヒューマンであること、倫理的であるといったことを非常に強調したことをやっておりますので、こういったことは普遍化、一般化できることではないかと考えておりますので、ご披露させていただきました。

以上です。

○司会（石田）

討論の時間がないという厳しいお発言でしたが、もう一方ぐらいいかがでしょうか。どうぞ。

○熊本大学（中島最吉 学生部長）

いろいろ問題があると思います。それで、先ほどテレビ、ラジオについての授業への活用を報告してもらいましたが、今一番気になっておりますのは、いろいろ変わり目に来ておりまして、共同の制作の方法とか、今お話がありました、一つの教材を各大学で利用できないとか、いろんなことがございます。

ただ、ここにも何名かいらっしゃいますけれども、全国学生部長会で2月16日に合いましたところでは、生涯学習局の方で、いわゆる生涯学習としての各大学でやっております公開講座、それにこの放送公開なども含めまして、もう少しこれも活性化してほしいというご要望が上がっている。

その中で、私も毎回思っておりますけれども、各地域社会の社会教育がございま

して、協議委員会でやっておられる。、実際に行きますと、相当どの地域も、公民館を中心としたいろんな講座がございます。要するに、大学である公開講座のレベルというものが、やはり公民館を中心でやっているものとは本質的に異なるべきではないか。いろんなものを各大学でやっておられますけれども、この間、そういうものを生涯学習局の方で分類して、資料もいただいたりしましたけれども、そうしますと、まず、私どもがずっと考えてきました地域で家庭のご婦人とか、それから引退された年配の方が非常に中心になって見ていただいた一般教養的なものが、一体どういうところに位置づけできるのか。それがまた授業への活用。そしてこれは今、最後は中間ということで、単位の問題が出てきませんでしたけれども、どの大学も、この放送教材を利用して、単位を認定するということに対しては、教授会などではなかなか抵抗のあるところだと思います。また、それに対応できる方法を考えなければいかぬと思いますけれども、一番気になりますのは、私どものところのテレビで「計測と制御」をやりまして、いろいろ反応を見たんですけれども、レベルの問題を特に単位化、授業への活用、何らかの形でそういうふうに持っていくとすれば、どのあたりをねらい、学生にかなり専門性のあるものを見せ、聞かせるというところで、今、非常に変わり目に来ているという感じがいたしまして、私個人も悩んでおります。

石田先生、ご示唆をお願いいたします。

○司会（石田）

どうもありがとうございました。

非常に難しい問題でありまして、先ほど生田先生がご発表になりましたけれども、例えば、医学部と歯学部。医学しかない大学と歯学部がある大学では、専門性と一般性ということになりますと、あの同じビデオ教材、それからテキストが、歯学部の学生では一般性のものという受け取られ方をしております。医学部で、歯については口腔外科しかない。医学部では、歯学教育というのは十分なされませんので、初めて歯について勉強できるということで、医学部のある大学の医学部の学生にとっては、専門性として受け取られているということがあります。一般性か専門性かということは、そういう問題とも関連をし、もともとは一般の人たちに向けてつくったビデオ教材でありますけれども、学生たちの間でもそういう違いが出てくる。そういう研究をこれからもっとしなければならぬのではないかと考えております。

甚だ申しわけありませんが、第2セッションの結果を受けて、第3セッションのときに「放送公開講座の現状と将来像」として、さらに深めていくことになっておりますので、この辺で、第2セッション第2分科会は閉じさせていただきたいと思います。（拍手）

(参考) 第2セッション第2分科会配付資料

第10回放送利用の大学公開講座シンポジウム
「都市と音楽」

「都市と音楽」

発表者 久保田 慶一
(鳴門教育大学学校教育学部)

近年《都市論》がブームだ。歴史学、社会学、建築史、さらに文化史といった諸々の領域において、《都市》という実体あるいは現象が研究の対象となり、様々な観点から《都市論》が展開されている。本講座では従来論じられることの少なかった、音楽学、特に音楽社会学の観点からこの《都市》を考察し、各領域が明らかにした《都市像》に新たな側面を加えることを試みている。

今日の《都市論》が明らかにした《都市》の姿とは、種々の実体と種々の機能とが有機的に結合した《複合体》という都市の姿であった。例えば、「博覧会場としての都市」、「排泄場としての都市」、「身分階層や家族の錯綜したネットワークとしての都市」、「モノが集合した場所としての都市」、「ストックとしての都市」、「消費・流行としての都市」など。

このように様々な姿を見せる《都市》にあって、音・音楽も様々な形となって現れ、また様々な機能する。都市を「象徴」する音・音楽、種々雑多な音・音楽が集積し多層的に響く都市、また種々の音を奏で、聴く様々な人間が集まる都市、レコード、CD、音譜が氾濫する都市、コンサートホールや音楽学校や集中する都市、一流音楽家の人々の注目を集め、街頭では辻音楽師が庶民の歌を聴かせる都市、時に音楽家に熱狂し、時に無視を決め込む都市の気粉れな聴衆等々。

本講座では、このような都市と音楽が描く様々な絵模様を、ヨーロッパや日本の代表的な《首都的都市》を例に、歴史的な展望をもとに見ていく。

ラジオ講座内容

- 第1回 都市と音楽
- 第2回 祝祭都市パリの音楽
- 第3回 近代都市パリの音楽
- 第4回 未来都市パリ 世紀末から現代へ
- 第5回 ハプスブルクの音楽都市ウィーン
- 第6回 音楽の都ウィーン
- 第7回 ふたつの世紀末
- 第8回 ベルリン サン・スーシーの夕べ

- 第9回 ドイツ・ロマン主義の都
- 第10回 ワイマールの光と影
- 第11回 大坂・大阪の音と音楽
- 第12回 江戸・東京の音と音楽
- 第13回 都市・人・音

印刷教材「都市と音楽」（教育芸術社、1992）より

目次の一部、ならびにP.63.

第5章	ハプスブルクの音楽都市ウィーン	56
第1節	ハプスブルクの祝祭都市	56
1.	《東方の国》の都 2. ハプスブルク家の都 3. ウィーン・バロックとマリア・テレージアの時代	
第2節	ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト	60
1.	モーツァルトとウィーン 2. 《ピアノの国》ウィーン 3. 《劇作家》モーツァルト	
第3節	ハイドンとベートーヴェン	65
1.	ハイドンとウィーン 2. ベートーヴェンとウィーンの貴族社会 3. ベートーヴェンの《苦悩》	
第6章	音楽の都ウィーン	71
第1節	3月革命前のウィーン	71
1.	ビーダーマイアー時代 2. 《シュェーベルティアーデ》 3. ロッシーニ・パガニーニ・ブーム	
第2節	音楽の都ウィーン	75
1.	リングシュトラッセ文化 2. ウィーン楽友協会とウィーン・フィルハーモニー 3. ブラームスとブルックナー	
第3節	ウィンナ・ワルツの世界	81
1.	「会議は踊る」 2. ウィンナ・ワルツ 3. ウィンナ・オペレッタ	
第7章	ふたつの世紀末	86
第1節	ウィーンの世紀末	86
1.	ウィーンの世紀末文化 2. シェーンベルク 3. 新ウィーン楽派	
第2節	ウィーンのユダヤ主義	91
1.	ウィーンのユダヤ人文化 2. マラーの《苦悩》 3. ハプスブルクの崩壊	
第3節	《中欧》の中核都市として	96
1.	マラー・ルネサンス 2. 1991/92年のウィーン 3. 《中欧》の復活	

思っています。ここは本当に《ピアノの国》です。」この年のクリスマス・イブには宮廷で、イタリアのピアニスト、ムーツィオ・クレメンティとの競演を行い、一躍ピアニスト・モーツァルトの名前をウィーンに轟かせることに成功した。

モーツァルトはウィーンでピアノをいわば武器に活動した。ピアノ愛好家には変奏曲を、あるいはヴァイオリンを加え二重奏ソナタを、また自身が独奏者として腕前を披露するためにはピアノ協奏曲を作曲した。ウィーンでの10年間の定住生活の前半に、モーツァルトが集中して作曲した分野はピアノ協奏曲であり、彼は新作を次々と予約演奏会で発表した。1782年から86年にかけてモーツァルトは15曲を作曲し、特に84年には6曲もの新作を発表し、父親に「ご想像のとおりほくは新作を何回か弾かなくてはなりません。ですから作曲しなければならないのです。」と書き送り、2月から4月までの5週間に計22回の演奏会をこなしたのである¹⁰⁾。

その他、この時期の注目すべき演奏会としては、1783年3月23日皇帝ヨーゼフ2世の臨席の下で行われたブルク劇場でのオール・モーツァルト・プログラムの大演奏会（練習

曲、協奏交響曲、『ハフナー交響曲』、そしてピアノ協奏曲の第5、13番、ピアノ変奏曲など、当時のウィーンに特徴的な《ごたまぜのプログラム》であった）、さらに1785年2月11日メールグルーベで開かれ、ザルツブルクから訪れた父がウィーンでの息子の晴れ舞台をつぶさに見とどけた演奏会が挙げられる。

この時には前日完成したばかりの協奏曲（第20番）が演奏された。しかし、モーツァルトがウィーンでの演奏会の演奏家としてもはやされたのはわずか4、5年の間だけであった。1782年から86年にかけて彼は15曲のピアノ協奏曲を書いたが、32歳の頃にはヴィルトゥオーソ（＝名人演奏家）としてのキャリアをほとんど捨ててしまっていた。そして少なくともウィーンでの主要な演奏会に彼が登場したという記録はこれ以後にはなかった¹¹⁾。

3. 《劇作家》モーツァルト

皇帝ヨーゼフ2世は《国民劇場》を興し、ドイツ語によるオペラ・ジングシュピールの創作・上演に努めた。モーツァルトは1781年7月30日、俳優兼台本作家のゴットリープ・シュテファニー（1741－1800）から「後宮からの誘拐」の台本を得、翌年の春には作曲を完成し、7月16日ブルク劇場でこれを上演し、大成功を収めた（オペラのヒロインは、この初演後3週間足らずで結婚する相手と同じ、コンスタンツェという名であった）。もっともこのジングシュピールは、マリア・テレージアとヨーゼフ2世が推進してきたドイツ語劇場の運動の中で、当劇場で上演された最後の作品ともなってしまった。

この上演後、ウィーンのアート界は急速にイタリアものに傾斜していく。すでにイタリア語のオペラを手がけていたモーツァルトはこの期に乗じて、1785年の秋からイタリア語

ブルク劇場写真

アンケート調査の例

今回の講義では、特にウィーンにおけるモーツァルトの活動の一部について、話をしました。
以下の質問に答え、該当する文字を○で囲んで下さい。

- (1) モーツァルトの生地ザルツブルクとウィーンの町をスライドで見ましたが、今最も印象に残っていることは、何ですか？
 - a. 都市の町並みの美しさ
 - b. 都市市民の生活の様子
 - c. モーツァルトが生活した町を見たこと
 - d. 都市における音楽以外の芸術の様子
 - e. その他 ()
- (2) ザルツブルクやウィーンの町について、どのような点について詳しく知りたいですか？
 - a. 都市の歴史
 - b. 都市構造
 - c. 都市文化一般
 - e. その他 ()
- (3) 放送公開講座の一部とモーツァルトの曲を聴いてもらいましたが、町の様子をスライドで見たことは、放送を聴いて理解することに役立ちましたか？
 - a. とても役に立った
 - b. ある程度役に立った
 - c. あまり役に立たなかった
 - e. むしろ逆効果であった
- (4) ウィーンとモーツァルトについて、他にどのようなことが詳しく知りたいですか？
 - a. モーツァルトの生涯
 - b. ウィーンでのその他の音楽活動の様子
 - c. モーツァルトがウィーンで住んだ場所など
 - d. ウィーンでの人間関係などの彼の社会的活動（フリーメイソンとの関係）
 - e. モーツァルトの他の音楽
 - f. その他 ()